

## 書 評

## 続編・荏部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』考

笹 倉 秀 夫

## 第 1 部

笹倉は先に、書評「荏部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』考」を発表した（『早稲田法学』93巻4号、2018年7月30日、<https://ci.nii.ac.jp/naid/120006501698>。以下、「書評」と呼ぶ）。この書評は、荏部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』（岩波新書、2006年。以下、「荏部本」と呼ぶ）中の重要論点が9点にもわたって、笹倉秀夫『丸山眞男論ノート』（みすず書房、1988年）およびその改訂版である笹倉秀夫『丸山眞男の思想世界』（みすず書房、2003年。以下、こちらを「笹倉本」と呼ぶ）と、主張（事実の掘り起こしとそれらによる丸山像の再構成）および典拠をめぐる不思議な重なり状態にある事実を問題提起したものであった。

これに対し、本稿第1部は、先に紙数の関係で扱えなかった、（笹倉以外の）他の著者の本と荏部本との不思議な重なりの事実を扱う。それらの事実を扱うことによって、笹倉だけが〈荏部問題〉の渦中の人ではないこと、それゆえ、笹倉が「自己顕示欲」などによって問題指摘をおこなっているのではないことが明らかになるだろう（本稿第2部をも参照）。この続編についても、「13年前のことを、なぜ今問題にするのか」と言う人がいるだろうが、奇妙な事実は時がたっても奇妙なまま解明を待っているのだ。しかも、学問研究の倫理に関わる事柄には、時効は、とりわけない。

扱うのは、1 今井弘道著『丸山眞男研究序説』（風行社、2004年）、2 山口定著『市民社会論』（有斐閣、2004年）の二つである。

## 1 今井弘道の著作と荏部本の関係

(a) 今井は、学部学生時代の丸山が**田辺元**に深く影響を受けていた、少くとも考えを田辺と共有していた事実を指摘する。丸山は1936年の東大法学部緑会雑誌懸賞当選論文「政治学に於ける国家の概念」を、「個人は国家を媒介としてのみ具体的定立をえつつ、しかも絶えず国家に対して否定的独立を保持するとき

関係に立たねばならぬ。しかもこうした関係は市民社会の制約を受けている国家構造からは到底生じえないのである。そこに弁証法的な全体主義を今日の全体主義から区別する必要が生じてくる。」という奇妙な言明でしめくくっているが、これは今井によれば田辺の思想を「踏襲」した、あるいはそれと「つながっている」言明であった。すなわち今井は、その著作『丸山眞男研究序説』（風行社、2004年。以下「今井本」と呼ぶ）において、次のように語っている：

今井本142-143頁：「丸山の『弁証法的な全体主義』という〔論文「政治学に於ける国家の概念」の〕モチーフは、ヘーゲルの法哲学に依拠しつつマルクスを克服していった田辺哲学を踏襲するところに成立したものであった、と私は考えている。田辺は、後に自らの「種の論理」の基本的モチーフを「従来私共の支配され来つた自由主義思想を批判すると同時に、単なる民族主義に立脚するいはゆる全体主義を否定」すること、そして、「前者の主体たる個人と、後者の基体とするところの民族とを、交互否定的に媒介し、以て基体即主体、主体即基体なる絶対媒介の立場に、現実と理想との実践的統一としての国家の、理性的根拠を発見しようと考へたこと」にあったとしている（田辺⑦、二五三頁）。丸山は、この田辺の図式を踏襲していると考えられる、というわけである。」（以下、下線はすべて笹倉による強調箇所である）

今井本163頁：「ここでの田辺の『種の論理』の骨子の定式化も、いま私が示唆したように、丸山の緑会論文〔「政治学に於ける国家の概念」〕における国家の規定とハッキリとつながっていることを透視させるものと確信しているが、そのことはこれまでに既に十分に主張してきた。ここでのポイントは、南原書評論文での丸山の言葉でいえば、田辺が、昭和九年の段階で、事実上、従来「自由主義思想に支配され来つた」自分は——本章でわれわれが見てきた丸山の言葉を用いていうなら——「自由と個人から社会と民族へと意味づけの力点を移動させて来た」、としている点にある。」

このように今井によれば、田辺は「自由主義」と「単なる民族主義に立脚するいはゆる全体主義」とをともに否定し、それらとは別の道、すなわち「主体たる個人」と「基体とするところの民族」との両項を「交互否定的に媒介」する道——弁証法的統一によって「主体即基体」の国家を樹立する道——を進んだ。そして今井によれば、丸山の「個人は国家を媒介としてのみ具体的定立をえつつ、しかも絶えず国家に対して否定的独立を保持する」関係、「弁証法的な全体主義」は、まさにこの田辺の弁証法の思想と「ハッキリとつながっている」のだった。

(b) 今井はまた、近衛内閣の「新体制」もこうした「個人の主体化」と「国家」とを同時追求する点で、上記の弁証法的な思考につながっていた、とする。

「国家総動員ということも、私は二つの側面があると思うんですよ。国家総

動員ということは、事後的に見れば中野さんの言うようなことになるのかなということと、もう一つは、しかし当時の歴史的状況の中では、国民の主体性を生かして軍部の独裁とか、あるいは神懸りの国家の神聖化とか、そういったものを撃ち破るエネルギーとすること、国民的な主体性を掘り起こすもの、生かすものとしての国家総動員という問題が考えられていたという側面が強くあったと思います。」（『情況』2004年7月号での菅との対談における今井発言。47頁）

「国民的な主体性を掘り起こすもの、生かすものとしての国家総動員」は、上述の田辺の「主体即基体」、すなわち「主体たる個人」と「基体とするところの民族」の弁証法的統一、それゆえまた丸山の「弁証法的な全体主義」に通底している、と。こうして、もし今井の上記〈田辺—丸山〉関係論が正しいならば、当時の丸山の思想は、その主体化論を通じて近衛新体制の論理とつながっている、ことにもなるのだが、まさにこの点について、今井は次のような発見を語る：

今井本78頁：「ここに、第一章で見た丸山の対話的エッセイ『或日の会話』（一九四〇年九月）に表現されているような、〈近衛新体制〉に対する『丸山の』思い入れの意味があった。そればかりか、〈近衛新体制〉それ自体が、『緊急権国家』に国民的主体の思想を投入して、官僚主義的戦時体制を克服するとともに、その国民的主体化をはかり、軍部の専横を抑制しようとの狙いを、一応はもっていたと評することも不可能ではないであろう。丸山は、この方向性を徹底的に押し進めることを願望していたのである。」（今井本32頁以下も同旨）

これは、丸山眞男論上で重大な意味をもつ事実の指摘である。戦前において軍国主義に精神的に抵抗していたとされる丸山が実は近衛内閣支持につながる文書を書いていて；そしてこれは「弁証法的な全体主義」という、学生時代以来の丸山の思想の表出物であった；近衛内閣支持の理由は、今井によれば〈近衛新体制〉がとる国民主体化の立場を「軍部の専横を抑制」することに使おうとする「願望」を丸山がもった点にあった、というのだからである。

今井はこのようにして、〈丸山—田辺—近衛新体制〉のトリアーデ発見に至ったのである。今井はその著で、自分のこの発見は、丸山理解上きわめて重要なものであること、および、この発見は京都学派に関する自分の長い研究の末に、最近になってようやく可能になったことだと述べている：

今井本5-6頁：「京都学派の哲学については、私の性向からして最も深い共感をもって理解することができたのは、三木清の哲学であった。この三木の哲学を手がかりに、西田哲学と田辺哲学を少しずつ読解するという作業は、なかなか困難な作業であったが、やがてその中で、三木のドイツ観念論哲

学とハイデッガー哲学の経験を経た上でのマルクスへの接近とそこから「構想力の論理」へとたどりつく過程、またさらには田辺元がハイデッガー経験を経る中で、それと対決したマルクスと対決しながら、マルクスをヘーゲルに依拠しながら克服し、そのことを通して同時に自らのカント主義の立場をヘーゲル主義の立場へと揚棄して「種の論理」を構想していった過程は、丸山の思想形成の過程において、決定的な意味をもつ背景をなしているのではないかとの確信を持つに至った。」

田辺元が示したヘーゲル主義への思想形成が丸山に与えた影響ないし両者の一致を明らかにするのは、「なかなか困難な作業であった」；しかし永年にわたる考究の結果、自分は青年丸山の思想に「決定的な意味を」もったこの関係をついに発見した；そしてこの発見によって、戦前の丸山の——これまでの丸山論では見落とされていた——意外な思想的側面、すなわち当時思想面で戦争協力を強めつつあった田辺元の思想と青年丸山の関係や、丸山の近衛新体制への接近、その基底を成す思想内容（とくに国家強化のための主体性論）を解明できるようになった、と今井は述べているのである。

ところが、これらと同じ内容の指摘が苅部本に見られる。すなわち、

(a) 苅部はその本の88-89頁において、次のように丸山の論文「政治学に於ける国家の概念」と田辺元との結びつきを——今井と同じ内容で——論じている。

苅部本88-89頁：「だが、先に引用した、終戦直後の座談会での発言で、丸山が「政治的な社会、あるいは国家」とくりかえしていることに注意したい。国家が真に国家としてなりたつには、個人の「否定的独立」が不可欠であるという原理は、学生時代の論文「政治学に於ける国家の概念」もすでに触れているし、同時代の知識人でも、たとえば田邊元のような「京都哲学」の哲学者が、個と全体との「対立的統一」として唱えたことである〔田邊一九三九〕。だがそれが、国家と個人とが否定しあう構造を指摘するのみにとどまるならば、現実には全体の秩序が危機に瀕し、個人の要求をかえりみる余裕がないとされるときには、国家による強引な動員をも正当化してしまうだろう。

しかしここで丸山は、おそらくソサエティという英語、ゲゼルシャフトというドイツ語——人と人がそれぞれの意志に基づいて集まり、作りあげる結社の意味をもつ——を念頭におきながら、国家もまた、一人一人の人間が、「人為」によって結成する「社会」としての性質を本来そなえているという理解を示している。発想は、個人の独立を題目として掲げるのみにとどまらず、そうした一人一人の「主体」が、「人為」を通じて政治権力を統御して

ゆく、その過程へと深まっている。「主体」としての個人の尊厳性は、論理上、あらゆる政治秩序の成立に先だつものであり、国家が暴力を行使してそれをふみにじることは許されない。」

丸山が「政治学に於ける国家の概念」（1936年）において出した、「国家が真に国家としてなりたつには、個人の「否定的独立」が不可欠である」という思想が、その頃に田辺元が出していた、「個と全体との「対立的統一」」の思想と通底していると、苅部も言うのである。「国家と個人とが否定しあう構造」においては——とくに「リベラル・デモクラシー」（下記参照）に見られたように個人を絶対化して国家と対立させるのであっては——「現実には全体の秩序が危機に瀕し、個人の要求をかえりみる余裕がないとされるときには、国家による強引な動員をも正当化してしまう」、すなわち一面的な全体主義がかえって帰結する、と丸山・田辺は考えた；この立場から、丸山は、「国家が真に国家としてなりたつ」ことをめざし個人の主体化を論じ、田辺は、「個と全体」を二者択一的ではなく、弁証法的な対立的統一において国家への個人の主体化を説いた；このように二人はともに、リベラル・デモクラシーでもなく全体主義でもなく、それらの弁証法的関係付けという、第三の道を模索した、と苅部もまたここで言っている。

(b) そしてこの点に関して重要なのが、苅部はまた上の点と結びつくかたちで、「政治学に於ける国家の概念」から4年後（1940年）の丸山の作品「或日の会話」に近衛内閣の「新体制」への期待が出ているとも指摘している事実である：

苅部本71頁：「この短い論文〔「政治学に於ける国家の概念」〕は、「近代」の〔…〕リベラル・デモクラシーの体制が、「現代」にあっては危機に瀕している、と当時の丸山が考えていたことを示している。〔…〕やがて助手論文執筆ののち、筆名で総合雑誌に発表した短文「或日の会話」（一九四〇年）で丸山は、「新体制」を唱えて発足した第二次近衛文磨内閣が、強い指導力を通じて経済改革にあたることへの期待を口にすることになる〔集1-313〕。これも、政権がリベラル・デモクラシーの危機をのりこえる可能性を、「新体制」の宣言に見たものと考えられるだろう。」

丸山は「政治学に於ける国家の概念」に見られたように、「リベラル・デモクラシーの危機をのりこえる可能性」を模索していた。ところが近衛内閣が、「新体制」の宣言を出した（1940年）。丸山はこの「新体制」に、リベラル・デモクラシーと全体主義をとともにのりこえる可能性を見出して、同年に匿名論文「或日の会話」で、それへの「期待を口にする」に至った、と苅部も言っているのである。

そして周知のようにこの近衛内閣の「新体制」こそ、田辺が個を中心とするリ

ベラル・デモクラシーと国家・民族を中心とする全体主義とをともに乗り越えんとして「種の論理」の延長線上で接近した政体だった。こうして荻部本においても丸山と田辺は近衛内閣支持をもって、つながっている。すなわちここでも、今井本と同様、〈丸山—田辺—近衛新体制〉のトリアーデが出ており、かつこのトリアーデが成り立つことの根底には、丸山、田辺、近衛新体制のそれぞれにおいて、リベラル・デモクラシーでもなく全体主義でもない、第三の道、「個と全体との「対立的統一」、主体的個人と共同体との結合の立場を目指す姿勢があったという認識が出ているのである。

①丸山の「否定的独立」の思想と田辺の「対立的統一」の思想との関係に最初に注目し、かつ両者の思想と近衛新体制との関係を問うたのは、今井である。②「或日の会話」に最初に注目し、近衛新体制との関係でのその意味の重要性を発見したのも今井であり（1997年に発表）、それを中野敏男が引き継いで論じた。③これら①と②がヘーゲル的な思想において結びつくこと、それを基底にしていた若き丸山には、それゆえ当時の暗い動き、ファシズムとの結びつきが問題になること、を最初に指摘したのも、今井である。①・②の歴史的事実の発掘と、それにもとづく丸山思想の再解釈があったのである。

これら戦前の丸山をめぐるショッキングな事実が出て来て沸き立っている当時の論壇とは無関係に、そのことを耳にすることもなく、荻部はこれと同じ事実の認識に達したのであろうか。今井が「困難な作業」に立ち向かい苦労の末に発見し、その発見をきわめて重要視している〈丸山と近衛新体制〉、〈丸山と田辺元〉をめぐる事実を、別人がすぐ後で（短期間に）いとも簡単に同内容で発見しえただけでなく、今井と同様に、この〈丸山と近衛新体制〉、〈丸山と田辺元〉の2点をリベラル・デモクラシーの危機に対する丸山の反応として相互に関係づける、丸山論上の新解釈をも提示しえた、というようなことが偶然に起こりうるものなのだろうか。

加えて、次の点が重要である。今井の上述の丸山理解に対しては、田口富久治からは「誤読」だとの厳しい批判が投げかけられた（『丸山真男とマルクスのほざまで』日本経済評論社、2005年、170-171頁）。すると、そうした「誤読」が、荻部によっても犯されていることになる。正解の重なりならいざしらず、この種の「誤読」の重なりが偶然に起こるということが、ありうるものなのだろうか。

〔この「誤読」問題については、次の点を参照されたい：かつて丸山は、筆者に次の旨語った（1985年6月24日のインタビュー——『早稲田法学』95巻4号に掲載予定）。「この学生論文『政治学に於ける国家の概念』で『否定的独立』の背景にあったのは、三木清の『弁証法的全体主義』の語であり、これを僕は使った。この立場はヘーゲルもとったが、しかしきわめて危ないものだ。なぜならそれは——三木やヘーゲルの意

図は別だっただろうが——田辺元の「絶対弁証法」に至る論理を内在させているからだ。すなわちそこからは、国家を超える価値が出てこないで、このため国家の神格化が生じることが起こる。この点で南原氏が言うように、ヘーゲルは「越ゆべからざる一線を越えた」のであり、これに対してカントは、認識の限界内に留まったために、それには至らなかった。」

ここからすると、丸山が結び付いたのは三木清であった。丸山は、田辺元の「絶対弁証法」や、それが結びついた近衛新体制を危険視していた。「否定的独立」に関して今井が三木に言及したのは妥当であったが、それを田辺の弁証法や近衛新体制に結びつけた点は、最終的には誤っていた。「否定的独立」は田辺の「否定的媒介」等から言葉を借用した可能性はあり、また「弁証法」はその後の田辺や近衛新体制に結びつく危険性はあった。実際、三木もまた昭和研究会等を通じて結びついていったのであり、その限りで今井の指摘は鋭かった。しかし丸山自身は、その危険に陥る手前で自覚的に留まっていたのである。それゆえ田口富久治の今井批判は最終的には当たっていた、と言える。]

そして、次の点も考察に値する。荻部本のこの部分の記述には不自然さを感じられる、という点である：今井・中野は丸山のナショナリズム、国家主義・民族主義を告発してきた。上記の今井本の、丸山が近衛新体制・田辺と結びついていたとする指摘も、丸山を告発するべく書かれている。これに対し荻部本は、丸山の「リベラリストの肖像」を中軸にしており、それゆえ丸山を告発する本ではない。では、荻部が今井らと同様に、丸山と近衛新体制や田辺元との結びつき・通底性に言及した点は、荻部本にとってどういう意味をもつか。実は、客観的には、何の意味ももっていないのである。荻部本88頁の上記引用箇所には、一方で、当時の丸山が（「リベラル・デモクラシーの危機をのりこえる可能性」を求めたがゆえに）田辺の「個と全体との「対立的統一」」と同様の考えを出したとあるが、しかし他方、続く箇所では、丸山は「主体」としての個人の尊厳性は、論理上、あらゆる政治秩序の成立に先だつものであり、国家が暴力を行使してそれをふみにじることは許されない」（89頁）という立場だったと、丸山のリベラリズムを強調している。この後者の面をめぐって丸山と田辺が同じだったとすると、田辺もリベラリストだったということになる。こうして荻部本は、今井が指摘し重視した〈丸山—田辺—近衛新体制〉のトリアード論と同じ事実関連を出しておりながら、その事実のもつ意味の考察がないまま終わっているのだ。荻部本において〈丸山—田辺—近衛新体制〉のトリアードは、ここでは示唆されているだけなのである。このトリアードの発見に、今井は大変な時間と努力を要したのだった。だとしたら、荻部も自分で発見するにはかなりの時間と努力を要したはずだ。そうした努力の末であろうに、この〈トリアード〉は、荻部本においてはインプリケーションが不鮮明のまま、すなわち言及されているだけで終わっているの



である。

今井本は、苅部本で挙げられていない。今井は、苅部本出版後の2006年に刊行した自著『三木清と丸山眞男の間』（風行社）の12頁に、苅部本のこの部分について、「ここ〔苅部本の上記箇所〕で取り上げられているいくつかの論点が、ここ数年の私の丸山研究の中心的モチーフをそのまま引き写したものであることに気づいたからである——刈部〔ママ〕はそのことを示そうとしていないが——」と書いている。

## 2 山口定の著作と苅部本の関係

山口定は『市民社会論』（有斐閣、2004年）62頁で、丸山と佐藤昇との対談「現代における革命の論理」（1961年）をめぐって次のように論じている：

山口本62頁：「この点に関しては、実は私には、ここで紹介した一連の意見交換の成果として貴重な発見があった。それは、丸山がこの時点で到達した「市民の両義性」に関する認識である。この時期、丸山は佐藤昇との対談（一九六一年）の中で、「民主主義の担い手としての市民」という概念には、「いろいろな民主的決定過程に参加してゆくシトワイアンの側面と公権力その他、上からの横からのあらゆる社会的圧力に抵抗してシビル・リパティーズを守ってゆく側面と両面を含めている」と語っている。問題は、この場合、丸山自身はこの両義性のどちらにコミットしようとするのかという点なのだが、丸山の回答は、「圧倒的多数の人間は、私生活を持ち、その中で日常要求を持ちながら、同時にパブリックな関心を持ち、パブリックなことに参加している」のであって、それを「受動的とみなして完全市民の能動性を賛美するのは、左右両翼の政治運動のいずれにもにおいて個人の抵抗の契機を見失わせる」という理由で、あくまでも私生活に根拠地をもつことが、「市民」の政治参加のあり方の基本として主張されている。

こうした「市民」的行動原理は、一九六〇年の安保闘争に際しての丸山の行動の軌跡を決めるものでもあった。…ただし、丸山の主張は、私生活に根拠地をもつ「市民」の「不完全市民」的<sup>不完全市民</sup>政治参加の受動性を安易に批判してはならない、という点にとどまるものではなかった。むしろ彼は、上記の発言の少し前の一九五九年に発表された論文の中で、日常生活に基づく「非政治的な目的をもった自主的結社が、まさにその立地から政治を含めた時代の重要な課題に対して、不斷に批判して行く伝統」を根づかせることの重要性を力説しており、「非政治的領域から発する政治的発言という近代市民の日常のモラルが育って行くこと」を強く期待している。」



すなわち、山口は、丸山がこの対談で、「圧倒的多数の人間は、私生活を持ち、その中で日常要求を持ちながら、同時にパブリックな関心を持ち、パブリックなことに参加している」（丸山の文）という事実から出発して、「あくまでも私生活に根拠地を持つことが、「市民」の政治参加のあり方の基本」（山口の文）だと「不完全市民」的政治参加の意義を強調したこと、そして、これとは対立する、「完全市民の能動性」（市民が活動を通じて鍛えられプロの活動家に並ぶほどに意識・能力を高めた状態）に期待するという、それまで支配的だった市民論に対し距離を置いたことを、高く評価する。

ここで山口は、「下からのコーポラティズム」・「アソシエーション」の提唱や職場の市民運動としての労働運動の観点の重視等として新市民社会論をまとめつつあった自分が、丸山の市民主義論にこの時点に至ってようやく出会って、大いに自信を得たこと、およびこの市民主義論の観点が丸山研究に新しい視点をもたらす性質のものであること、を熱く語っている。上の引用文中の「この点に関しては、実は私には、ここで紹介した一連の意見交換の成果として貴重な発見があった」との山口の記述からは、ようやくにして丸山の「不完全市民」概念に会えた山口の興奮ぶりがうかがえる。

ところが、同じ論旨と典拠での同じ議論が荻部本に見られる。すなわち荻部本180頁以下は、「「市民主義」への懐疑」と題して、丸山は、「市民」を実体化することには反対であったとし、丸山のこの立場の根底には、次のような考え方があったと論じている。すなわち、丸山は、「日ごろ、さまざまな職業に就いて生活する人々が、やむをえずその寸暇をさいて、自分の本来の目的ではない政治活動へとむかい、職場の内部をこえた「外への連帯性」にふみでるとき、意識のそうした側面を「市民的」と呼びうるだけなのである。」（荻部の文）と考え、「完全市民像」に距離を感じていた、と。その際荻部は、この議論の根拠として、1961年の、丸山と佐藤昇との対談「現代における革命の論理」を挙げている：

荻部本181・182頁：「ところが丸山は、こうした「市民主義」の主張に、はげしい違和感を表明する。一九六一（昭和三十六）年、佐藤昇との対談「現代における革命の論理」では、「市民」という存在を実体として考えるのは不適切だとして、「市民主義」という言葉は使わないと宣言している〔座4-149〕。日ごろ、さまざまな職業に就いて生活する人々が、やむをえずその寸暇をさいて、自分の本来の目的ではない政治活動へとむかい、職場の内部をこえた「外への連帯性」にふみでるとき、意識のそうした側面を「市民的」と呼びうるだけなのである。

いやいやながらの政治参加      これとは異なって、自分の生活のすべてを政

治参加に捧げるような「完全市民像」に、丸山はむしろ、大衆社会における不安と孤立感を共同体との合一化で癒そうとする、ファシズムと紙一重の危うさを指摘する [座 4-142]。政治のプロフェッショナルではない、一般人の政治とのかかわりは、あくまでも「いやいやながら」のはたらきかけ、「パートタイム参加」にとどまるべきものなのである [集 8-39、丸山二〇〇五]。久野にせよ松下にせよ、政治とは別に生活の基盤をもつ人々を「市民」と呼んでおり、ここで言う「完全市民」となることを推奨したのではない。だが丸山は、「市民」の名が一人歩きをすることで、地道な生活に根をおかない「市民運動」活動家——プロ「市民」という逆説——が続出することを憂慮したのだろう。」

論旨も典拠（丸山と佐藤昇との対談「現代における革命の論理」、1961年）も、同じなのである。

①山口のような長年丸山に関心をもち続けてきた政治学の第一人者が、研究者間での「一連の意見交換の成果として」、ようやく2004年頃に「発見」したと証言していることがらで、②「この点に関しては、実は私には […] 貴重な発見があった」と強調していることがらでもある、これらを別の人物がそのすぐ後で、③丸山の膨大な数の対話記録中の特定の一つ——佐藤昇との対談記録（一九六一年）——からこともなく同じように発見し、④それに山口とまったく同じ視点から意味付け（市民運動のあり方のユニークな問題提起を読み取る）をし、⑤山口とまったく同じかたちで、「市民」についての丸山のユニークな思想（「完全市民」に対する「不完全市民」の強調）を読み取るということ——ここまでのアイデアの一致は、偶然に起こりうるものなのだろうか。

加えて、山口の本『市民社会論』は、政治学会会長をも務めた政治学者による、久々の単著であり（これが遺作となった）、〈下からの市民社会形成〉の政治戦略を提言した書として注目を浴びたし、その中で（丸山の政治学にも深く関係する）「市民社会論」を主題にして丸山をも取り上げているのだから、荻部が丸山論を準備する過程上で読まなかったとは、考えがたい（そもそも、丸山はしばしば「市民派」・「市民社会派」と呼ばれていたのだから、「市民社会論」のタイトルは丸山を連想させる。『市民社会論』なる本が出れば、丸山論を準備する者は関連性を期待してそれをひもとくだろうということだ）。

山口本は、荻部本において言及されていない。

以上 2 件において先行文献と荻部本との間に見られる、重要事実の発掘とその意義解明のこのような重なりは、偶然の一致によるのか、それともアイデアの（故意ないし過失による）無断借用によるのか。

もしも前者（偶然の一致）によるのであれば、今井・山口が永年の思索・討議の結果ようやく発見したことを、苅部はごく短時間でこともなげに見いだしたことになる。この点はさておき、この場合には、先行研究があったことを知った時点で誠実に対応するのが、モラルである。とりわけ苅部本は、先に書評で示したように、自分が独自に発見したものを軸にしていることを——自著は「出来あいのさまざまな「丸山論」の定型を回避しながら、その〔丸山の〕内実に迫」（同11頁）だったものとか、自著は丸山の重要メッセージと「出あった驚きを、読んでくれる方々とともにすること」（同225頁）にあるのだとかと——強調しているのだから、苅部がそれを知った時点（それは既に2006年である）に、実は自分の発見物ではなかったという事実を示し読者の誤解を解くことが、読者のみならず今井・山口に対しても、必要である。

もしも後者のうち過失に起因する無断借用によるのであれば、上と同様の誠実な対応が必要である。

もしも後者のうち故意の無断借用によるのであれば、論外である。

## 第2部

笹倉の「苅部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』考」に関し、河野有理（苅部直の弟弟子で首都大学東京の教授だと言う）がFacebookに2回にわたって反駁・苅部擁護の文を載せた（2018年12月5日1:23付、<https://www.facebook.com/100003459295373/posts/1218965384895426/>、同12月7日22:16付、<https://www.facebook.com/100003459295373/posts/1222404311218200/>）。河野は、笹倉の書評がインターネット上で注目され始めたことを憂慮し「初期消火」のために「エントリー」した、と言う。河野の文は、政治思想史研究者である、大学教授の肩書きをもつ人物が発表した文であるし、これに応答することは笹倉の書評を補充する好機でもあるので、以下にこの文を扱っておく。

【Ⅰ】河野の文の第一の特徴は、笹倉が〈苅部本と笹倉本の間で丸山思想の解釈が九つも重なっている〉と事実問題を提起しているのに、それらの事実については論じないで、(a) 笹倉自身と、(b) 笹倉本とを貶めることによって笹倉書評の信頼性を低めようとしている点にある。

(a) 笹倉自身を貶めることによって笹倉書評の信頼性を低めようとしている言説としては、次のようなものがある：

「この〔笹倉による〕書評を見ると難者〔笹倉のこと〕が自分の作品の独創性に執拗にこだわっていることが分かります。これが本当にそこまで独創的

だったのかについては判断を留保しますが、過去の思想家のテキストを対象とする研究において（新出資料の発見や執筆者認定あるいは執筆年代に関する重大な事実の発見等を抜きに）純粹に「解釈」についての独創をここまで強固に主張することにはいささかの疑問を感じます。」

すなわち、笹倉は強い自己顕示欲のゆえに上記書評を書いた、それゆえ書評の信頼度は低い、というのである。

河野はまた、笹倉書評の動機について、「「たった一行なぜ俺の名前を書けないのか」的なことなのではないかとも邪推してしまいます」とも言っている。笹倉は、苅部著『丸山真男——リベラリストの肖像』の参考文献欄に笹倉の作品を入れてもらえなかったことが不満で書評を書いた、というのである。

笹倉は、こうした「邪推」をする人がいるだろうと考えて、書評冒頭に「予め断っておくが、以下には笹倉本からの多くの引用が出てくるのだが、それらは笹倉の先行性を誇るためのものではない。また、苅部本はその215頁から222頁にわたって多くの「参考文献」を挙げているところ、以下に見るほどに重なりが多い笹倉本は、そこにすら挙げていないのだが、本稿はそのことへの不満などといったことによるものではない；苅部本・笹倉本間のアイデアの不可思議な重なりを、事実として記述するにすぎない。」とわざわざ書いておいた。だが、これによつては二つの「邪推」はどちらも防げなかったのだ。

語る人への人格攻撃によって、語られていることがらを無意味化しようとする河野のこの文を読んでいると、イソップのかの童話が光ってくる：「オオカミが来た」と何回も嘘をついた羊番の少年がいた。ある日、本当にオオカミが現れ少年は本気で「オオカミが来た」と村中に知らせようとした。だが村人たちは、少年の人格問題（虚言癖）を前面に押し出して、少年が語る事実を問題にしなかった。こうして村人たちは、その大切な羊たちを、出沒したオオカミによってことごとく噛み殺されてしまった……。村人たちは、「オオカミが来た」については——イソップが言いたかったことではないだろうが——「事実なのかどうか」が、その少年が嘘つきかどうかとは別に、検討すべきだったのだ。たとえ笹倉が自己顕示欲で書評を書いた、苅部本参照文献欄に自著を挙げてもらえなかったことへの腹いせで書評を書いたとしても、そこに書かれていることが事実かどうかは、別途検討されるべきことがらとしてあるのだ。

童話で言えば、本件により似ているのは「王様は裸だ」と叫んだ子供の話の方だろう。笹倉は、苅部本と笹倉本との中身の異常な重なりを目の当たりにして、その事実を、かの子供のように提起しただけである。

(b) 笹倉本を貶めることによって書評の信用度を低めようとする点は、河野の次の言説に見られる：

「笹倉本は、研究史においては、今井寿一郎『丸山眞男著作ノート』（1964年）などと同じく、基礎的資料群が存在しない時代において文献資料を渉猟したその意味での労作であることに間違いはありません。『集』登場以前に、熱心に読まれたり、資料集的な使われ方をしたという話も、なるほどそういうこともあったであろうと思われます。しかし、丸山眞男研究は、その後、少なくとも二回の画期を経ています。一度目は『集』『書簡集』『座談』等の基礎的な刊行史料が出そろった時点、二度目は没後史料が寄贈された東京女子大学丸山文庫において草稿類のデジタル・アーカイブが構築された時点です。」

笹倉本は、丸山眞男の著作集・書簡集・座談会記録集などの刊行前の本で、それゆえそれら新資料の刊行という事実によって乗り越えられた；そういう価値がなくなった本の著者には、アイデアの重なり問題を提起する資格はない、というのである。

河野は、笹倉本が「無視しうる先行研究」に属すとも言う：「『笹倉本は、本人が思っておられるほどには、研究史において重視されてはいない』ということに結局尽きてしまうのではないかと思います」、と。だが、

**第一に**、本についても、それが河野の指摘のように新資料出現で時代遅れとなり、中身としても「無視しうる先行研究」になっているとしても、その本が扱っている諸主題が他者の本と異常に重なっている事実があるなら、その事実は、別途問われうる問題としてあり続ける。

**第二に**、河野のこの議論では、そもそも議論の前提が誤っている。すなわち河野は、「笹倉本」が1988年刊の『丸山眞男論ノート』だとの前提で文を書いている。その刊行後（1990年代以降）、丸山眞男の著作集等や新資料が続々と出たので、それらを踏まえて書かれていない「笹倉本」は時代乗り越えられた、と。

しかし「笹倉本」とは、笹倉書評からすぐ分かるように、正しくは『丸山眞男の思想世界』のことであり、その刊行は2003年である。2003年刊であるがゆえに『丸山眞男の思想世界』は、当時すでに出版されていた新資料である、『丸山眞男集』（全16巻・別巻1、1995-97年）や、丸山の『自己内対話』（1998年）、『丸山眞男講義録』（1998-2000年）、丸山の未発表の諸作品を公刊した『丸山眞男手帖』（1997年以降）、『丸山眞男座談』（1998年）等の検討を踏まえている。このことは、「笹倉本」第1、3部、そして第2部等の中身からも明らかだ。それら新資料が刊行されたからこそ、それらに目を通して、2003年に『丸山眞男論ノート』の改訂・増補版を笹倉は出したのだ。

以上の事実からは、河野が、『丸山眞男の思想世界』をよく読みもせず、それゆえこの本と『丸山眞男論ノート』とを混同しつつ、〈笹倉本は丸山新資料刊行

前の、古い時代のものだ」と決めつけ議論していることが分かる。

**第三に**、旧著の『丸山眞男論ノート』自体、後に上記『丸山眞男集』や『丸山眞男座談』等に収録される丸山の諸作品のほとんどを（国会図書館や各大学図書館での資料収集をも含め）精査した上で書かれたものであった（それゆえ笹倉は、後に『丸山眞男集』等を検討した際、『丸山眞男論ノート』の諸論点に大幅修正をする必要は感じなかった。新資料を検討してみて、意外感をもたなかった）。河野は、『丸山眞男論ノート』と、その後に出版された『丸山眞男集』等の新資料とを、相互に照らし合わさないで、すなわち『丸山眞男論ノート』すらよく読まないで、〈『丸山眞男集』等の新資料出現で『丸山眞男論ノート』等は無意味化した〉としているのだ。

**第四に**、上で河野はまた、近時丸山の「草稿類のデジタル・アーカイブが構築された」からそれ以前の研究成果は全面的に古くなったとも言っていた。しかしそう論じるためには、アーカイブ化された「草稿類」中のどれが、何故に、笹倉本が出した丸山眞男像を崩す力をもつのかを具体的に示す必要がある。せめてアーカイブに依拠した誰かの新研究の一つだけでも使って、笹倉本の出した丸山像のどこがどう崩れ、さらには本全体がどう時代遅れになったかを示すべきだった。

一般論としてだが、こんな史料操作態様で思想史研究者が務まるものなのだろうか——河野のこんな議論が何人かの大学教授によって、「さすがプロの仕事」と SNS 上で褒められているのであるが……。

河野の言説には、上記以外にも問題がある。この点を、以下【Ⅱ】～【Ⅶ】において検討しておく。

**【Ⅱ】** 笹倉が提起した九つの論点の内、河野が唯一論及しているのが、第 1 点の、「葛藤」の問題である。

河野による、この第 1 点の取り扱いは次のようなものである：

「そしてそもそも、ある思想家の内面に相矛盾する要素の葛藤が存したこと、またそうした葛藤が思想家の知的生産力の源であったこと等の指摘について他の著書と「重なり」が存することが、研究倫理上の重大な瑕疵に当たるような論点になりうるでしょうか。およそほぼすべての偉大な思想家はそうした葛藤や矛盾を抱えていたのではないかという気が直観的にはします。」

笹倉が鬼の首を取ったかのように論じる〈丸山の内的葛藤〉は、「偉大な思想家はそうした葛藤や矛盾を抱えてい」るものなのだから、陳腐なテーマである；それを丸山論で丸山の重要な特徴として強調するのは、視野狭窄だ；しかも、思想

家に広く見られるものである以上、丸山論でも誰もが指摘しうることだから、荻部が〈丸山の内的葛藤〉を指摘しこの点で笹倉本との間に重なりがあったとしても、何ら問題ではない、と。

だが、これを陳腐なテーマだとすることは、**第一に**、自分が擁護しようとしている荻部を貶めることになる。なぜなら荻部本の11頁には、次のようにあるからである：

「丸山の言葉がはらむ熱気は、おそらく、自分自身の内部にある葛藤を見つめるところから発している。たとえば、政治参加と隠遁といったように、あい矛盾する二つの要求が、両方とも自分の中に並びたっていることを、丸山は深く気づいていた。そこで不決断のままとどまることを潔しとせず、何らかの方向へとみずからをおしだそうとする努力。それが丸山の文章に強い緊張感を与えている。世に流布する丸山のイメージとは、そうして生まれた言説の、いわば突端部分を肥大化させたものであろう。」

このように荻部は、「相矛盾する要素の葛藤」の視点が丸山をとらえるうえできわめて重要だと考え、これまでの丸山論（＝「世に流布する丸山のイメージ」）の根本問題はこの視点を欠いていたところにあるとしている。

だとしたら河野は、荻部のこの議論に対しても、「およそほぼすべての偉大な思想家はそうした葛藤や矛盾を抱えていたのではないかという気が直観的にはします」と反論し、それゆえ〈荻部先輩が、丸山をめぐってそういう陳腐な論点を仰々しく議論の柱にされるのは、視野狭窄です〉、〈誰でもが思想家に簡単に見いだせる論点なのだから、荻部先輩が批判される「世に流布する丸山のイメージ」の本ですら、そういう陳腐な論点を丸山について見逃していたわけではないでしょう〉、とでも言うのであろうか。

加えて、**第二に**、荻部本に対するサントリー学術賞授与の理由の一つは、審査員だった田中明彦が「丸山自身の知的な葛藤」と題したその荻部本評価の文において明らかにしているように、「戦後のはなばなしい活躍の背後にある丸山自身の知的な葛藤も、彼自身の人間性の叙述とあいまって、興味深く読める」ことであった（田中明彦 [https://www.suntory.co.jp/sfnd/prize\\_ssah/detail/2006sr1.html](https://www.suntory.co.jp/sfnd/prize_ssah/detail/2006sr1.html)）。だとすれば、河野的に考えるならば、サントリー学術賞授与もその選定理由に大欠陥があったことになる。「およそほぼすべての偉大な思想家はそうした葛藤や矛盾を抱えてい」るのに、そういう陳腐なことを重要主題だとして論じた点を表彰のメインの理由としたのだから。

**第三に**、河野が「およそほぼすべての偉大な思想家はそうした葛藤や矛盾を抱えていたのではないかという気が直観的には」と言うのに、それまでの丸山論には「葛藤や矛盾」の視点から丸山を論じたものがなかった（この点は、研究



史を見れば明らかだし、上のように荻部自身が指摘している)。だとするなら、笹倉や荻部が「葛藤や矛盾」を軸にして丸山を論じたことには、逆に大いに意義があることになる。両著は、それまでの丸山論が見逃していた丸山の「葛藤や矛盾」を明らかにすることによって、丸山が、河野言うところの「偉大な思想家」の一人である証を初めて提示し丸山復権に貢献したのだから。

第四に、このテーマで問われているのは、丸山が「葛藤や矛盾を抱えていた」かどうかのレヴェルの問題ではない。笹倉本が——そして荻部本が——問うたのは、もっと具体的に、①どういうことがら（複数）をめぐる、どのようなかたちで、原理的な諸葛藤が丸山にあったか、②それら葛藤の自覚が丸山の思想の全体をどう規定しているのか、③自己の思想形成上、どういう要素に規定されて丸山はそういう思考に至ったのか、④葛藤の問題を深めることによって、丸山は思想史上で、いかなる人物に共振し、いかなる人物には違和感をもっていたか、⑤葛藤の視点が政治や人生を考える上で、どう重要だと丸山は考えていたか等であり、これらには、個々の論点ごとに立ち入った検討が必要である。「偉大な思想家はそうした葛藤や矛盾を抱えてい」るものだとしても、「葛藤や矛盾」の態様は各人で異なるのだから、個別の検討が欠かせないし、それこそが各人の根本、田中明彦の言う「彼自身の人間性」に関わっていく道であるのだ。「偉大な思想家はそうした葛藤や矛盾を抱えてい」るものだ、との一言でこの問題を片付けるのであっては、思想史はやっていけない。

ところで、河野は、笹倉が提起した他の八つの論点については、「ここでは一番はじめの（しかしおそらく笹倉がもっとも重視しているであろう）「緊張」の論点【Ⅱ】の論点」のみ扱いましたが、以下他の論点についてもほぼ同旨であると考えます」として、取り上げないと言う。根拠を示さずに残る八つもの論点を、「ほぼ同旨」になるからとして処理しているのである。「ほぼ同旨」とは、上にあったように〈優れた思想家にはよく見られる議論だからテーマとして陳腐だ〉ということが八つの論点をめぐっても言える、ということのほかにはない。だが、そうだとすると、これら八つの論点もまた荻部本においても——笹倉本と重なるかたちで——丸山理解のカギとして重視されていた（笹倉の書評参照）のであるから、河野は、これら八つの論点をめぐっても、自分が擁護しようとする荻部本を笹倉本とともに貶めていることにもなる。荻部本もまた、笹倉本と同様、それら〈テーマとして陳腐なもの〉を重視していることになるのだからである。

笹倉本や荻部本で扱っている、残る八つの論点が、本当に陳腐なものだと判断するには、①それらの論点を深めることによって、丸山の思想説明のカギが得られるかどうか、②それらをめぐる丸山の問題提起が我々にも重要であるのかどう

か、③それらの議論が他の思想家にも見られるものなのかどうか、の検討を要する。これらの検討、および④各論点をめぐって笹倉本と荻部本との間で重なりはないかの検討は、丸山の全作品を読み、そこから明らかになる丸山の思想の全体像、思想の軸や思考の特徴を考え、さらにこれまでの丸山論を一つひとつ押さえ、かつ笹倉本と荻部本を緻密に比較することによって、初めて可能になることである。

【Ⅲ】 河野は、荻部本に問題がないとする根拠の一つとして、荻部本には笹倉本からの無断引用（コピペ）が見当たらない点を挙げている：

「実際に両書の引用箇所、および下線箇所を読めば、笹倉の主張する「重なり」がそうした類〔無断引用（コピペ）〕のものではないことが容易に判明します。重なることが当然の人名や書名を除けば、両者は「字面」レベルではほぼ全く似ていないのです。笹倉が悪質な印象操作をあえてしたとはさすがに思えないのですが（したがって風説流布の責任は一義的にはまともに日本語の読めない「怠惰な野次馬」連にあると思いますが）、書き方としてはかなりミスリーディングであろうと思います。」

笹倉が重要主題におけるアイデアの重なりを問題にしているのに（ただし、笹倉書評の論点「2」、精神の「型」をめぐっては別問題もある）、河野は、「両者は「字面」レベルではほぼ全く似ていない」と、無断引用（コピペ・盗用・剽窃）があったかどうかを問題にしているのだ。念のために論じているだけだということかもしれないが、しかし河野はこの議論の後でアイデアの重なりについては論じないまま、「本件については、「盗用」や「剽窃」でないのはもちろんのこと、研究倫理上疑問がある行為ですらなく、もっといえばそれによって荻部本の価値が下落することは一切ないと私は確信しています（前エントリーで要するに「言いがかり」だと考える旨述べた所以です）」と結論している。河野はアイデアの重なり問題は、この議論によってさらにと流し去ってしまっている。（なお、この点からは、9点にわたって重要なアイデアの重なりがある事実自体については、河野には否定するつもりがないことが推認される。）

【Ⅳ】 河野の次の議論は、どうか：

「とはいえ、「先行研究」とはあくまで「誘惑するもの」としてあるべきもののはずです。無視しえぬ魅力を放つ研究であれば、おのずと言及されるでしょうし、そうした場合には無理して無視を決め込む後進がいたとしても、そうした姿勢の持つこわばりは他の具眼の士にやがて指摘されてしまう性質のものではないかと思います。荻部本は新書として確かに笹倉本を無視しているのですが、それは言うてみれば「普通に無視」しているのであって、とりわけかたくななこわばりを感じさせるものではないかと思います。この12年

間、笹倉以外の専門研究者コミュニティから疑義の声（「苅部本が笹倉本を参考文献表に加えないのはおかしい！」）が出ていないのはそういうことです、としか言いようがないのではないかと思います。」

苅部本と笹倉本との中身の異様な重なり気付くためには、両著を丹念に読み、かつその押し出している主題の意味——丸山思想にとっての、そして我々へのメッセージとしての——を理解することが欠かせない。そもそも、苅部本と笹倉本を丹念に読む人、そのうえで両著を丹念に比較する人は、当人たち以外にはまずいないだろう。加えて、何人かの人が問題や重要論点に気付き、したがって両著の重なりにも気付いたとしても、本人に代わってあえて問題点指摘を買って出る人は、まずいないだろう。12年たっても指摘がないのは、そういう事情による。こういうことは、研究史上よくあることだ。

【V】 次の議論はどうか。河野は、笹倉の書評の第一論点について、苅部の記述との関係で次のように言う。

「石田雄には「日本政治思想史における丸山眞男の位置——「緊張」という視角を中心として」（1998年）というまさに笹倉がこだわる丸山における「緊張」を主題とした論文があるのですが、ここで石田は笹倉本には一言も言及されていません。同論文は『丸山眞男との対話』と題して笹倉本と同じ版元から2005年に刊行されていますが、笹倉がこの本及び論文に対し「通常では考えられないほどの重なり」などとして論難した形跡は、管見の限り、ありません。してみると、笹倉もまた丸山の文章のみから「緊張」という主題にたどりつきうることを認めておられるのではないのでしょうか。」

これは、第一に、「A 君もやったが、B 君もやった。それなのになぜ A 君だけをとがめ B 君をとがめないのか」の議論ではないか。第二に、「笹倉の『丸山眞男論ノート』の出版は、1988年であるから、その後の20年間に、丸山論で「丸山の「内部にある葛藤」」を扱うものが上述の他にも散見するのは事実である（たとえば『思想』883号（1998年）所収の石田雄論文・斎藤純一論文、上記の飯田論文など）。しかし、これらでの「丸山の「内部にある葛藤」」への論及は主軸たる位置にはない。石田論文は苅部本ほどには、主題・内容上笹倉本と重なってはいない。しかも、石田が「笹倉本」を読んでいたかは不明だが、苅部は——笹倉書評で明示したように——読んでいた。

【VI】 河野による苅部本の次の評価にも、前提事実に関わる問題がある。すなわち河野は言う、「苅部本を読む限り、とり立てて独創を誇示するような表現に出会うことはありません」と。だがこれは、事実と反する。

笹倉が書評の冒頭で示した苅部の言説、たとえば、「丸山眞男という希有な知性がのこしたことばの群れの中へわけいて、そのなかをさまよう途上で見つけ

た、珠玉や棒きれや落とし穴を、できるかぎり克明に記し、それぞれと出あった驚きを、読んでくれる方々とともにすること」（荻部本225頁）、とか、「丸山にまつわる「イメージの層」をとりよけ、出来あいのさまざまな「丸山論」の定型を回避しながら、その内実に迫」（同11頁）ろうとか、「これまで論じられてきたあれこれにふれていないという玄人筋の声に対しては、なりゆくいきおいでこうなった、とだけ答えておこう」（同225頁）は、自分の議論の独自性を印象づけるものではないと、本当に言えるだろうか。

河野の説くところは、我々の経験則にも反する。そもそも、本や論文を書くときには誰もが（自分が主張するものには独自性がある）と判断して、書くものだ。独自の主張がないのに本、ましてや岩波新書を書こうとする著者、書かせ出版させようとする編集者はいない。つまり出版したこと自体が、独自性を——主要論点について——押し出そうとした行為なのだ（そうした本の主要論点が、9点において先行本と不思議な重なりをもっていた。にもかかわらず、それら9点が、先行研究がなく自分が独自に発見したかのように書かれているのだ）。

【Ⅶ】 上との関連で、河野の次の言説はどうか。

「難者〔笹倉のこと〕は荻部本のコアは、笹倉本のそれと要は同じであり、従って荻部本には自ら誇る独創性（すでに述べたようにそんなに誇ってないような気がします）はない、あとは伝記的エピソードに過ぎないというようなことを書いていますが、これも「あー、歴史をやったことがないんだなあ」と感じます。評伝を書いたことがある人、もしくは少しでも人物史に関心のある人であれば、評伝（そう、評伝なのですよ同書は）において伝記的エピソードがいかに大事かということは分かってもらえることと思います。荻部本のこの意味での叙事はとても優れています。」

思想家に関する「評伝」、様々な「伝記的エピソード」は、それらが思想形成過程上でどういう意味をもったか、思想家の思想のどういう現れかなどを考え、それらを語ることによって始めて意味となる。荻部がやろうとしたのも、これである（単なるエピソードの羅列だけでは、思想家の評伝にはならない）。伝記的エピソードと結び付けて荻部が語っているこれら重要な、丸山の思想や思想形成過程が、荻部本と笹倉本とで9点にもわたって不思議な重なり状態にあるのである。（それら9点を除けば、あとは思想形成に関らないエピソードないし重要だが公知のエピソードだということだ。）

以上をまとめよう。

・河野は、上記九つの論点について、笹倉本と荻部本とで内容が重なっていること自体は認めているのか、九つの論点での重なりを否定した議論は、一切して

いない。

- ・それら九つの論点に関しては、〈陳腐な内容だから重なっていても問題ない〉とするのである。だがこの論理では、自分が擁護している苅部本をも貶めることになる。これら九つの論点は、苅部本で重要な、力の入った論点のほとんどであり、世の苅部本評価もこれらをめぐるものだからである。

- ・〈陳腐な内容だから〉以外の抗弁は、剽窃ではないから問題はないとか、別の論者の議論も笹倉本と重なっているとかといったものだった。

- ・実際には河野は、九つの論点中第一の論点しか検討していない。その第一の論点に関わる抗弁は、論点として陳腐だ、笹倉本はもはや時代遅れで「無視しうる先行研究」だ、笹倉書評は不純な動機による等といったものだった。

なお、河野の「エントリー」については、①森新之介「河野有理氏の2つのFB記事について」<https://researchmap.jp/jounxorus-2167846>、②江口「某」 「学術論文における言及とクレジット (2) 河野有理先生のエントリーへの疑問」 <https://yonosuke.net/eguchi/archives/10089>をも参照されたい。